

実績概要 (ホームページ掲載用)

研究又は活動のテーマ	鹿児島県内に現存する土木遺産の地域づくりへの活用に向けた調査・研究
助成事業者	第一工業大学
代表者	本田 泰寛
(目 的) 土木遺産は地域発展の歴史や、その時代・地域における土木技術者の創意工夫を伝える物証であると共に、地域づくりに活用しうる重要な手段ともなる。鹿児島県では土木学会によって48件の近代土木遺産がリストアップされたが、その中には大規模な改修や撤去を余儀なくされた事例が散見される。土木遺産を地域づくりの核となる資産として考えた場合、その保存状況や使用状況を把握しておくことは必要であると考え、網羅的な調査の継続は容易ではない。こうした状況に資するべく、①鹿児島県内に残る土木遺産の現況調査、②地域づくりに向けた基礎資料の作成と活用法の提案、を目的とした調査・研究を実施する。	
(概 要) 平成29年度は、上記目的のうち①鹿児島県内に残る土木遺産の現況調査を実施し、目視での状況確認と写真撮影、必要に応じて自治体や管理者へのヒアリング、歴史資料の調査等を実施した。今回は40件の土木遺産の現況を把握し、現存が37件、撤去が3件であることが明らかとなった。また、撤去ではないが原形の確認ができない大改造も1件確認された。 現存する37件に対しては、具体的な状況を把握するために①場所、②使用状況、③活用度、④保存状態の4項目^(※)に着目した調査を実施した。①場所については原位置での使用が37件で、移築されているのは1件のみであった。②使用状況については、完全現役・限定現役が27件、③活用度では日常使用が26件であった。②と③の項目の結果は、土木遺産が現役の土木構造物として日常的に使用される傾向にあることを示唆していると考えられる(なお、②使用状況のうち使用停止は11件であり、③活用度のうち、放置は6件である)。④保存状態については原形保存が21件であり、使用状況と活用度に比してやや減少している(部分変更、大改造は13件)。これは、現役の土木構造物として継続的に使用していく上で、交通荷重の増大等様々な与条件の変化に対応するために、何らかの変更を加える必要が生じたためと推察される。また、「放置」とされる土木遺産の中には、高欄の落下や石畳の剥離など損傷の度合いが大きい例も見られ、将来的な補修や効率的な活用法の模索が必要になると思われる。 その他、今回の調査では、大隅横川駅や嘉例川駅での駅舎を利用した定期市の開催や博物館としての利用、山田の凱旋門周辺での移動販売が実施されていることが確認できた。これらの事例は、単純にモノが残っていることが重要なのではなく、土木遺産によって構成される独特の空間(場所)が、本来の用途とは異なる形で活用されうる可能性を示唆していると考えられる。 来年度は、今年度調査が出来なかった土木遺産の調査を実施し、さらに土木遺産の活用に向けて詳細な調査・分析を実施する予定である。 (※)文化庁編：『建物の見方・しらべ方 近代土木遺産の保存と活用』、ぎょうせい、1998	